

## 相互動詞「～あう」の動作を行なうヒトの表されかた

木村静子

国際大学

## 要旨

接尾辞「あう」がついた相互動詞が述語になっていて、その動作を行なうのが二人のヒトである場合、接尾辞「あう」がつく前の動詞が支配する格が、相互動詞になることによってどのように変化するかをみる。また、元の動詞の直接対象、間接対象が相互動詞になった場合、相互動作の相手になるのか、そうでないのかによって両者間の働きかけに違いがあることもわかった。

キーワード：相互動詞・格・直接対象・間接対象

## 0. はじめに

本稿では、複合動詞「～あう」の動作を行うヒトがどのように文中に現れているかをみるものである。本稿で取り上げるのは、①複合動詞「～あう」が述語になっていて、②その動作を行うのが二人のヒトであり、③そのヒトが文中に明示されているものである。そして、元の動詞がどのような格を支配し、それが相互動作になった場合どのように変化するかという観点で下位分類を行なった。

## 1 あわせ主語になっているもの

基本的には、動作を行うヒトとヒトが並立助詞「ト」によって結びつけられているものである。

## 1.1. AトBハ

## 1.1.1 元の動詞が二格とト格、どちらも支配する動詞

AガBニ～する/AガBト～する→AトBハ～しあう

二格で表されている間接対象、またはト格で表されている相互動作の相手が、動作の主体をも担うことになり、あわせ主語として表されたものである。

- (1) 何杯目かのカクテルをあけたマスターと女は、すっかり意気投合し安さんを見無視してしゃべり合っている。(時代や)
- (2) 彼の申し出を受けるかどうかについて、大造とより子はそれまでに何度も話しあっていた。(魔術)

(1) は店のマスターとそこに来ている客の若い女性であり、(2) は「彼」という人の会社で働かないか、という申し出を受けるかどうかについて話し合っている夫婦である。(1) の元の動詞「しゃべる」は「マスターガ女ニトしゃべる」というのであるが、「しゃべりあう」という相互動詞になったことにより「女」が動作主体にもなったので、「ト」により「マスター」と並べられたものである。

1.1.2. 元の動詞がニ格、またはニ格と後置詞(対して)を要求する動詞

AガBニ(対して)～する→AトBハ～しあう

ニ格で示された間接対象であったものが、動作主体ともなりあわせ主語として表されたものである。

- (3) 私と彼は、やっと向い合せに坐り、何ということなく、ニッコリし合った。

(言い寄る)

- (4) 顔を見ようとする後藤と、そむけようとする治子はあらい合って、しまいになぜか、治子は閉じた目にうすい涙を浮べたりあうる。

(ああ紅の)

(3) は食卓をはさんで座ったボーイフレンドとガールフレンドであり、(4) は夫婦である。(3) の元の動詞が支配する格は間接対象を表すニであり、「私ガ彼ニ/ニ対してニッコリする」であるが、「ニッコリしあう」という相互動詞になることにより、「彼」も動作主体をも担うことになり、「私」とともに並べ立てられたものである。

1.1.3. 元の動詞がヲ格を支配する動詞

AガBヲ～する→AトBハ～しあう

ヲ格で示されていた直接対象者が動作主体ともなり、あわせ主語として表されたものである。

- (5) 私と父はしばらく無言で見つめ合っていました。やがて父の方から口を開きました。「有馬はいまどうしてるんや。」

(錦繡)

元の動詞「見つめる」が支配する格はヲ格であり、「私ガ父ヲ見つめる」となるが、「見つめあう」という相互動作になったことにより、「父」も動作主体になったものである。

1.1.4. 元の動詞がト格とヲ格を支配する動詞

AガBトXヲ～する→AトBハXヲ～しあう

元の動詞も相互の動作を表すものであり、相互の動作を行なうヒトがあわせ主語として表されているものである。元の動詞のときのヲ格で示された直接対象と、相互動詞になったときにヲ格で示された直接対象は同じものである。

- (6) 弘徽殿の女御と、斎宮の女御は、はなやかに、**帝の寵愛**をきそいあっていた。

(新源氏)

- (7) 紫の上と中宮はむつまじく、手紙のやりとりに**友情**を交し合っていた。

(新源氏)

1.1.5. 元の動詞が格を支配しない自動詞

Aガ～する。Bモ～する。→AトBハ～しあう

それぞれの動作を行なう二人なのであるが、相互動詞になったことにより、動作を行うヒトが二者要求され、その二者が並立を表す「ト」であわされたものである。

(8) 「じゃあ、もう一本煙草をやるよ」「ありがとう。ちゃんと停めてあげますよ」ジョルトと男は笑い合った。 (葡萄)

(8) は酒場で出逢い、意気投合した男性二人であるが、「笑いあう」はそれぞれの動作であり、「ジョルト」「男」の二人は同じ時に同じ動作を行う両者を表している。

仁田(1998) はまものの相互構文<sup>2</sup>のト格は、動詞の動作に直接関わるヒトであって、付加的な共同行為者でない、としている。そして、そのことは、「いっしょに」あるいは「共に」を挿入してみるとわかるとし、次のような例をあげている。(p. 15 より)

ア) その窓際で小野寺が安部怜子と向かい合っている。

イ) その窓際で小野寺が安部怜子と一緒に向い合っている。

ア) はまものの相互構文で、ト格は相互動作の相手を表しているが、イ) のように「いっしょに」をつけてみると、小野寺と安部怜子は共同行為者になってしまうということである。一方、「第三者の相互構文」<sup>3</sup>では、「いっしょに・ともに」を挿入しても下記のウ・エのように、その意味が変わらないとしている。(p. 31 より)

ウ) 広志ハ武志ト敵ヲ攻メアッタ。

エ) 広志ハ武志ト一緒ニ敵ヲ攻メアッタ。

上記(8)の「笑いあう」は「いっしょに・ともに」を挿入しても意味が変わらず、「ジョルト」「男」は仁田が言うところの共同行為者ということになる。

### 1.1.6. 所属物(特に体、または体の一部)に対する働きかけ

#### 1.1.6.1. AガBノXヲ～する→AトBハXヲ～しあう

元の動詞は相手の体の一部に働きかけていて、その直接対象の持ち主が「Bノ」というようにノ格で示されている。しかし、相互動詞になることにより、Bも動作を行うヒトになり、あわせ主語で表されるようになったものである。また、元の動詞のときの直接対象XはBのものであったが、相互動詞が支配するヲ格で示されたX'はABそれぞれのものである。

(9) 「縄手さまは?」「死んだ」美也と健次郎はじっと眼を見つめ合った。 (果し合い)

(10) 僕と弟は立ちあがることさえできず、体をしめつけあうだけなのだ。 (銅育)

(9) は愛し合っている二人であり、(10) は縄で一緒にしぼりつけられている二人である。

(9) でいえば「美也ガ健次郎ノ眼ヲ見つめる」という格をとるが、「見つめあう」という相互動作になったことにより、健次郎も動作を行うヒトになり、あわせ主語としてあらわされたものである。また、「眼を見つめあう」という時の眼は互いの眼になる。

その他：手を握りあう・肩を抱きあう

#### 1.1.6.2. AガBトノXヲ～する→AトBハXヲ～しあう

(11) 源氏と内大臣はいまも友情を保ちあっているが、政治権力をめぐる争いになると、別であった。 (新源氏)

元の動詞は「源氏ガ内大臣トノ友情ヲ保つ」という格をとり、「保つ」も相互的な相手を

要求し、その相手がトノ格で表され、AとB（源氏と内大臣）が共有しているX（友情）をかざっている。その元の動詞「保つ」が相互動詞「保ちあう」になり、動作を行なう両者があわせ主語で表されたものである。元の動詞の時も、「～あう」という相互動詞になった時もX（友情）は両者で共有しているものである。二人の関係は友達でもあり、政敵でもある。

## 1.2 AトBガ

### 1.2.1. 元の動詞がニ格、またはト格を支配する動詞

AガBニ～する/AガBト～する →AトBガ～しあう

- (12) 青木と藤次郎が、いかにも物慣れた口ぶりで風の強さとか方角とかを語り合っている間に、若い女がお茶と茶うけの菓子、皮をむいたばかりの梨などをはこんで来て、口数少なく挨拶すると去った。 (蟬時雨)
- (13) としと悦子が話しあっているころ、倫ときんは柳橋の卯月という船宿の二階で男芸者の善好を相手に話していた。 (女坂)

(12) は役人と農民の関係で、役人が農作物の出来ぐあいなどを見回りに来ているところであり、(13) は、「とし」は「きん」の娘で、「悦子」は「倫」の娘である。としと悦子はこの日初めて会ったという状況である。元の動詞「話す」は「としガ悦子ニ/ト話す」という格をとるが、「話しあう」という相互動作になることにより、間接対象であった「悦子」も動作の主体になったので、あわせ主語として表されたものである。

### 1.2.2. 元の動詞がニ格を支配する動詞

AガBニ～する →AトBガ～しあう

以下の(14)の「粧った女」はバーのママであり、「白粉気のない女」は客の女性である。

- (14) 粧った女と白粉気のない女が、カウンターを境に向き合っている。 (隣りの女)

「向く」が支配する格はニ格の外にト格も可能かと思っただが、インターネットで「～と向く」を検索してみると出てこず、「～へと向く」という形でのみ出てきたので、「向く」はニ格のみを支配するとした。

### 1.2.3. 元の動詞がヲ格を支配する動詞

AガBヲ～する→AトBガ～しあう

- (15) 地下室からおもてへ出ようとしたら階段の踊り場で、峰子とノブちゃんがもみ合っていた。 (隣りの女)
- (16) そういうときは身のまわりに、きらわれ者ときらわれ者がやり合っているぞ、やらせておけといった空気が濃密に立ちこめるのがわかった。 (蟬時雨)

(15) は店の女主人と客の二人、(16) は試合をしている仲のよくない二人で、道場では一人は嫌われていて、もう一人は白い目で見られている。(16)の「やりあう」は「争う」という意味だが、元の動詞「やる」の意味は「こらしめる」とか「害を加える」という意味

であり、「AガBヲやる」というようにヲ格を支配する。「きらわれ者ガきらわれ者ヲやる」という格をとっていたのが、「やりあう」となったことにより、直接対象の「きらわれ者」が動作主体にもなったので、あわせ主語となって表されたものである。

その他：殴りあう・打ちあう

#### 1.2.4. 元の動詞がト格を支配する動詞

AガBト～する → AトBガ～しあう

元の動詞も相互の動作を表しているものである。

- (17) 廊下では修一郎と行助が組みあっていた。(夏)
- (18) 於継との間がしっくりいなくても、今ではその方が自然なのだという達観さえ持っていた。(中略) 姑と嫁が睦みあっているところは、よほどうまく騙しあっているからに違いない。(華岡)
- (17) は母親違いの兄弟であり、(18) は特定の姑と嫁ではなく一般的な姑と嫁である。

#### 1.3. AトBトハ

この「AトBトハ」また、4の「AトBトガ」は、並立を表す助詞「ト」によってAとBが結びつき、それが「ハ」によって取り立てられたり、ガ格をとり主語になったりしたものである。しかし、ここでの「ト」は、例えば「紙とペンとは机の上にある」のようにただあるものを羅列しているのではなく、相互動作の相手を表している。この「AトBトハ」また、4の「AトBトガ」を、本稿ではあわせ主語とした。

##### 1.3.1. 元の動詞がニ格とヲ格を支配する動詞

AガBニXヲ～する → AトBトハXヲ～しあう

ニ格で示されていた間接対象が動作の主体をも担い、あわせ主語として表されたものである。Xは両者共通のものとなっている。

- (19) 大鷗鷲尊と菟道稚郎子とは、皇位を譲り合い、菟道稚郎子が解決の道を自殺に選んだ事は、周知の美談となっているが、この美談は痛ましい。(蘇我)

(19) で皇位を譲りあっているのは、三兄弟のうちの次男と末の弟である。元の動詞は「大鷗鷲尊ガ菟道稚郎子ニ皇位を譲る」という格をとるが、「譲りあう」という相互動作になったことで、間接対象であった菟道稚郎子も動作の主体となりあわせ主語としてあらわされたものである。この時の「皇位」はそれぞれのモノではなく、一つのモノである。

##### 1.3.2. 元の動詞がヲ格支配の他動詞のもの

AガBヲ～する → AトBトハ～しあう

ヲ格で示された動作の直接的な対象者であったものが動作の主体でもあるようになったものである。

(20) 秀子とお前のお父さんとは、秀子が東京の女子短大に通ってる頃知り合ってね。

(結婚する)

秀子とお父さんの関係は夫婦である。「秀子がお前のお父さんヲ知る」という格をとっていたのが、「知りあう」という相互動詞になり、直接対象の「お父さん」も動作主体になったので、あわせ主語として表されるようになったものである。

### 1.3.3. 元の動詞が格を支配しない自動詞のもの

Aガ～する。Bガ～する。→AトBトハ～しあう

それぞれの動作を表すもので、その動作を両者で一緒に行っていることを表すのに動詞を相互動詞にし、二人のヒトをあわせ主語としたものである。

(21) 私と龍とは、徳利がころがっているテーブルをはさんで、力なく笑い合った。(忍ぶ川)

「龍」というのは居酒屋の主人で「私」とは仲がよい間柄である。「私ガ笑った」「龍ガ笑った」という二人の行為を「笑いあう」という相互動作にし、二者をあわせ主語で表したものである。「私」と「龍」は相互動作の相手ではなく、同じ動作を同じ時に一緒に行った相手である。

### 3.4. 元の動詞がないもの

(22) どうも銀公とぼくとはお目当がかち合ってるらしいんだ。総じて小ぶりで手足のしなやかなという、どうもそういうことらしいんだ。(葎手)

知り合い同士の二人という関係である。「かつ」という動詞はないので、「かちあう」という相互動作を行う二者があわせ主語として表されているものである。

### 1.4. AトBトガ

#### 1.4.1. 元の動詞が二格またはト格をとる動詞

AガBニ～する/AガBト～する→AトBトガ～しあう

二格で示されていた間接対象が動作主体にもなり、それが並列助詞で結びつけられ主語となったものである。

(23) 吟子の中に二つの吟子が揺れている。これまで表に出ていた吟子と、奥に潜んでいた吟子とがぶつかり合っている。(花埋み)

(24) 曖昧だった姿勢が定まったこの三日間は、彼の頭の中で、山田の話の京子という女と、津上京子とが重なり合って動かない。(砂の上)

(23)、(24)はどちらも同一人物である。(23)は「吟子」、(24)は二人の京子であるが、それは同一人物の「京子」である。(24)では、元の動詞「重なる」の時には「京子という女ガ津上京子ニ/ト重なる」という格になるが、相互動詞「重なりあう」になると、間接対象の「津上京子」も動作主体になり、あわせ主語として表されたものである。

#### 1.4.2. 元の動詞がト格をとるもの

AガBト～する→AトBトガ～しあう

元の動詞も相互的な動作の相手を示すト格をとるもので、それが並列助詞の「ト」で結び付けられ、主語を表すガ格が更についたものである。

(25) その「守護代織田」は室町末期に二つにわかれ、尾張清洲城にいる織田と同岩倉にいる織田とが勢力を競いあった。(国盗り)

(25) は織田氏の一族とも考えられるが、城主の織田として一人のヒトと考えた。

#### 1.5. AモBモ

取り立て助詞の「モ」によってAとBが並立的に結ばれたものである。本稿ではあわせ主語としてここに分類した。

##### 1.5.1. 間接対象のニ格を要求する動詞

AガBニ～する→AモBモ～しあう

間接対象であったものが動作の主体ともなり、並立的に「モ」で結び付けられたもので、以下の1例のみであった。

(26) 二人でつれだって逃亡しようか、それとも別々に別れたほうがいいのかと。そしてもし、どちらか異教徒たちの餌食となったとしても、一人がまだ残っているよう別々になることを決心したのです。(中略)しかし一人の司祭がまだこの日本に残っているということは、ちょうど、ローマのカタコンブに聖燭台の油燈が一つだけ燃えつつけている——それだけの意味はある筈です。だからガルペも私も、たもとを分って別れたのちも、できるだけ生き続けようと、誓いあいました。(沈黙)

どちらも宣教師であり、元の動詞「誓う」の場合、本稿では「ガルペガ私ニ誓う」という格になるとした。その場合間接対象であった私が動作主体にもなり、あわせ主語になったものである。従って、互いに相互の働きかけがあるものである。しかし、もし「誓う」を「神に誓う」とすると、相手への働きかけはなく、両者で同じ動作をおこなう、つまり、ガルペと私は同じ動作を行う二人ということになる。

## 2. 主語と補語にわかれているもの

相互動作の主体と受け手を主語と補語にわけ、主語を中心として述べたものである。

### 2.1. AハBト

#### 2.1.1. 元の動詞が二格とト格、どちらも支配するもの

AガBニ～する/AガBト～する→AハBト～しあう

ニ格で表されていた間接対象が、相互の動作の相手としてト格をとったものである。

(27) 私は父の健康に就いてよく母と話しあった。(心)

(28) 今朝、私はそういう自分の数年前の夢を思い出し、(中略)、その丸木造りの小屋の中のさまざまな家具の位置を換えたり、それに就いて私自身と相談し合ったりしていた。

(風立ちぬ)

(27) は私と母であり、(28) は私と私自身である。(27) は元の動詞の場合は、「私ガ母ニ／ト話す」という格になるが、「話しあう」という相互動詞になることにより、間接対象であった「母」が相互の動作の相手となったので、補語としてト格をとったものである。

### 2.1.2. 元の動詞が二格を支配するもの

AガBニ～する→AハBト～しあう

二格で表されていた間接対象が、ト格で示され相互動作の相手となったものである。

(29) 伊之助は上がり框の板に腰かけると、身体を斜めにして大家とむき合った。

(ささやく河)

(30) 文四郎はその夜に里村家老に言われたこと、そして今夜の始末を洗いざらい話した。

話の途中で、横山は尾形久万喜と眼を見かわしたり、うなずき合ったりした。(蟬時雨)

(29) は岡っぴきの「伊之助」と、聞き込みをしている相手の「大家」である。(30) の「横山」、「尾形久万喜」は藩の中老などで、「里村家老」の悪事を聞いている状況である。

(30) の元の動詞「うなずく」は、「横山ガ尾形久万喜ニ／ニ対してうなずく」というように二格もニ対しても、両方支配できる。

その他：向いあう

### 2.1.3. 元の動詞が二格またはト格と、ヲ格を支配するもの

AガBニXヲ～する／AガBトXヲ～する→AハBトXヲ～しあう

二格で示された間接対象が、動作主体ともなり、相互動作の相手を示すト格をとったものである。また、ヲ格で表された名詞は両者で共有するものである。

(31) 十年前に、数夫は姉と至福のときをわかちあっていた。 (幸福)

元の動詞「わかちあう」は「わける」と同じような意味であるので、「わける」同様、二格もト格も支配するように思えるが、(31) の場合の「至福のとき」は両者で共有しているものなので、「数夫ガ姉(?)ニ／ト至福ノときヲわかちあう」というように二格にすると不自然な感じがする。

### 2.1.4. 元の動詞がヲ格を支配するもの

#### 2.1.4.1. ヲ格で示される名詞がヒトである場合。

AガBヲ～する→AハBト～しあう

ヲ格で示されていた動作の直接対象者が、相互動作の相手となりト格で示されたものである。

(32) 泉之助は、間違いなくそのことで志田とやり合ったのだ。 (闇の顔)

(33) 俺、カサブランカで、素性のわからねエ日本人の女と知り合ったんだ。 (葡萄)

(34) 兵馬の荒っぽい挑戦が、胸の内の荒涼とした感情を呼び起こすことに間違いはなかつ

た。それがなぜなのかと深く考えることまではせず、文四郎は兵馬と竹刀を打ち合う。

(蟬時雨)

(32) は不正を働いている「志田」と、それを追求していた「泉之助」で、「泉之助」が斬られたので、その理由を外の人が推測して述べているものである。(33) は主語がハダカ格で表されていて、元の動詞「知る」は「俺ガ日本人の女ヲ知る」という格になるが、相互動詞の「知りあう」になると直接対象の「日本人の女」が相互の動作の相手としてト格で表されたものである。(34)の「打ちあう」の元の動詞「打つ」は「AがBを打つ」であり、下記のようにBはヒトでもモノでも可能である。

- ・ボクサーが相手を打つ
- ・ボクサーがサンドバックを打つ

しかし、「打つ」がヒトと、打つ手段のモノの両方を取るときには「Aガ竹刀デBヲ打つ」となると思うのだが、(34)のように「打ちあう」という相互動詞になると、「AガBト竹刀ヲ打ちあう」と手段であった「竹刀」が直接対象に変化できるようである。しかし、一方では「竹刀ヲ打ちあう」と連語として考えることもできるのかもしれない。

#### 2.1.4.2. ヲ格で示される名詞がモノである場合

AガXヲ～する／BガXヲ～する→AハBトXヲ～しあう

(35) 渡辺は、首席監督官と検討し合った末、造船所本部の三階にある設計部軍艦課の使っている部屋を改築し、特殊な密室をその奥まった場所に作らせることに決定した。

(戦艦)

(35) の元の動詞「検討する」の場合は「特殊な密室を作る場所」を両者で検討していたと受け取れる。従って、「渡辺」と「首席監督官」は両者で同じ行為を一緒に行なっている二人であり、相互動作の相手とは異なる。

#### 2.1.5. 元の動詞がガ格を支配するもの

AガBガ～する→AハBト～しあう

ガ格で示された能力の対象が相互動作の相手になり、補語としてト格で表されたもの。

(36) そのキーワードを見たとき、守はようやく、老人と分かりあえていた一手遅れだったけど分かりあえていたかもしれないと思った。

(魔術)

(36) は少年の「守」と「老人」であり、少年は事件を捜査していて、老人は犯人である。「わかる」は「守ガ老人ガノヲわかる」のようにヲ格をとることもある。「わかる」という動詞の対象が「老人」であるが、「わかりあう」という相互動詞になったことにより、「老人」は相互の動作の相手となり、ト格で示されたものである。

#### 2.1.6. 元の動詞がト格を支配する動詞の場合

AガBト～する→AハBト～しあう

元の動詞も相互の動作を表しているものである。

- (37) 彼の茶碗には紅茶とミルクをなみなみ入れ、自分の分にはこっそり焼酎を半分以上入れて、ぼくは彼と乾杯しあった。(裸の王様)

上記は「私」である「ぼく」と小学生と思える少年の「彼」である。

### 2.1.7. 元の動詞がト格とヲ格を支配する動詞の場合

AガBトXヲ～する→AハBトXヲ～しあう

元の動詞も相互の動作を表しているものである。

- (38) あのかたと、現し身の上で、愛を契ったり恋をささやかれたりするのは避けよう、と決心いたしましたの。……こんな、男女の愛もあるのですわ……わたくしは充分、あのかたと愛を交しあっていますの。お文のやりとりで……。心のうちで……。 (新源氏)
- (38) は、「わたくし」は源氏が思いを寄せている朝顔の姫君で、「あのかた」は源氏である。

### 2.1.9. 相互の動作の相手の所属物（特に体、または体の一部）に対する働きかけの場合

#### 2.1.9.1 元の動詞がヲ格を支配する動詞の場合

AガBノXヲ～する→AハBトX'ヲ～しあう

直接対象者であった B が動作主体にもなったので、相互動作の相手をあらわすト格をとるようになったものであり、それによって、「X」は両者の X を表すようになった。

- (39) 時津は車からとび降りて、柳原と手を握りあった。(デュアル)

- (40) 僕はふりかえり、教員と短い時間、顔を見つめあった。(人間の羊)

(39) では、元の動詞「握る」は「時津が柳原ノ手ヲ握る」という格をとるが、「握りあう」になると「手」は両者の手を表している。なお、時津と柳原は高校時代の友達である。

## 2.2. AガBト

### 2.2.1. 元の動詞がニ格とト格、どちらも支配するもの

AガBニ～する/AガBト～する→AガBト～しあう

ニ格で示されていた間接対象が相互動作の相手になったので、補語としてト格で表されたものである。

- (41) 警官がちょっとその場を離れ、パトカーのそばで同僚となにか話し合ってから、また戻ってきた。(言わず)

元の動詞「話しあう」は「警官ガ同僚ニ/ト話す」という格をとるが、「話す」が相互動詞の「話しあう」となり、「同僚」が相互動作の相手となったことから、ト格をとるようになったものである。

その他：しゃべりあう

## 2.2.2. 元の動詞がヲ格を支配するもの

### 2.2.2.1. 直接対象がヒトである場合

AガBヲ～する→AガBト～しあう

直接対象のヒトが、相互動作の相手となりト格で表されたものである。

(42) もし、エステルが、お金持ちのアメリカ人と知り合って、アメリカにこないかって誘われたら、どうする？ (葡萄)

(43) いつからか男と女の恋人同士はほとんどこなくなり、二人づれはたいがい男同士か女同士、ときにはひとりでやってきた男がほかの男とみつめあい、店をでるときにはなにげなくいっしょになったりすることもしばしば。 (聖少女)

(42) のエステルの相手は不特定のお金持ちのアメリカ人であり、(43) はどちらも不特定の男性二人である。(43) の場合は、元の動詞「見つめる」は「男がほかの男ヲ見つめる」という格をとるが、それが「見つめあう」という相互の動作となったことにより、直接目的語であった「ほかの男」が相互の動作の相手となりト格をとったものである。

### 2.2.2.2. ヲ格で示されたものがヒトでない場合

AガXヲ～する。BガXヲ～する→AガBトXヲ～しあう

ヲ格で示された名詞がヒトではなくモノであり、主体はこのモノに直接働きかけている。これを両者で同時に行っているもので、この直接対象のモノは両者で共通のものである。よって、「AガBトXヲ～しあう」のト格は相互動作の相手を示すト格ではなく、「AガBと一緒に」としても意味は変わらず、共同で動作を行なうヒトを示すト格である。以下の(44)の場合は「未紀がほんとの父と一緒に近親相姦の血の汁をすすりあった」ということである。

(44) 作家と別れたあと、ぼくは夜の空を赤、白、金色の糸でジグザクに縫っているミシンの広告ネオンをみあげながら、未紀がほんとの父と近親相姦の血の汁をすすりあったところで、それがなんだというのだ、とおもったことは事実である。 (聖少女)

## 2.3. AハBトハ

相互動作の相手を示すト格が「ハ」によって取りたてられたものである。

### 2.3.1. 元の動詞がヲ格支配の動詞であるもの

AガBヲ～する→AハBトハ～しあう

(45) お父さまは若い時から一風変わったかたで、世をすねて暮しておいでだったが、私とは信じあって契りも深かった。 (新源氏)

(45) は元の動詞「信じる」の直接対象であった「私」が相互動作の相手になったので、ト格で示された補語となり、「ハ」によって取りたてられたものである。なお、「お父さま」と「私」の関係は夫婦である。

## 2.4. AハBトモ

3と同様、ト格で示された相互動作の相手が「モ」によって取りたてられているものである。

#### 2.4.1. 元の動詞がないもの

「取り組む」という動詞はあるが、「取っ組む」という動詞は辞書に見出し語として出ていなかった。

(46) 奥様は勿論柔道などはおやりになったことがないと思いますけれど、私はこれでも高校時代に柔道着を着て男子の生徒とも取っ組み合っていたことがあるんです。(交歓)

#### 2.5. AハBニ

動詞が相互動詞なのであるから、相互動作の主体と受け手を主語と補語にわけて述べる場合には補語は一般的には相互動作の相手を表すト格をとるのだが、間接的な対象を表すニ格をとっているものである。これは1例のみであった。

##### 2.5.1. 元の動詞もニ格支配の動詞であるもの

AガBニ～する→AハBニ～しあう

(47) さわは、光夫を抱いた庄三に、暫く無言で向き合っていたが、「健さんが生きてるとい  
うのはほんとですかね。」「ほんとだよ。」と、ゆみが答えた。(向い風)

元の動詞「向く」は「さわガ庄三ニ向く」という格をとるが、「向きあう」という相互動詞になっても同じ格をとっている。向き合っているのはゆみの実母の母親「さわ」と、ゆみの義理の父であり、夫ともなってしまった「庄三」の二人である。

#### 2.6. AハBトだけ

相互動作の相手が「だけ」によって取りたてられているもの

##### 2.6.1. 元の動詞がニ格とト格、どちらも支配するもの

AガBニ～する/AガBト～する→AハBトだけ～しあう

ニ格で表された間接的な対象が、相互動作の相手となりト格で示され、「だけ」によって取りたてられたものである。以下の(48)は元の動詞「語りあう」の場合は「私ガひとりの友人ニ/ト語る」という格をとるが、「語る」が相互動詞「語りあう」となり、間接対象であった「ひとりの友人」が相互動作の相手を示すト格をとったものである。

(48) 私は、検挙された彼について、当時もっとも親しかったひとりの友人とだけ、ひっそりと語り合った。(夏の栞)

#### 3. 相互の動作を行う両者のうち、どちらか一方のみが明示されているもの

##### 3.1. Φ+Bト

主語が表されておらず、相互動作を行う一方のみが補語として表されているものである。

##### 3.1.1. 元の動詞がニ格とト格、どちらも支配するもの

AガBニ～する/AガBト～する→Φ+Bト～しあう

(49) 自分の妻としての位置を動かすかもしれない女性と一つ家の中に毎日毎晩顔を合わせ、何気なく語り合っている。 (女坂)

(50) 「お父さんが、モーツァルトを聴いているなんて、想像でけへんわ」。私のその言葉に、父は少し思案顔で言い返しました。「お前の縁談について『モーツァルト』の主人と話し合ってるんや。」 (錦繡)

(49)の「女性」はお妾さんであり、この女性と語りあっているのは文脈より正妻だとわかる。(50)は父と喫茶店の主人である。

### 3.1.2. 元の動詞が二格を支配するもの

AガBニ～する→Φ+Bト～しあう

二格で表された間接的対象が、相互動作の相手となりト格をとっているものである。

(51) 原さんが眠りに行ったということに私は、よかった、とおもい、久しぶりに小雨の降る静かな日だから、原さんが眠れるといいが、と曾根さんと云合う。(夏の葉)

(51)は病院のロビーで、患者の世話を何人かで交代して行っているうちの「曾根」という人と言いつている状況であるが、主語は前後の文脈より「私」だとわかるものである。その他：触れあう・向いあう・向きあう・微笑みあう

### 3.1.3. 元の動詞が二格またはト格と、ヲ格を支配するもの

AガBニXヲ～する/AガBトXヲ～する→Φ+BトX'ヲ～しあう

(52) 「ともかくどうもこのところ様子がおかしいということと、殺人現場へもいやに早く現れる。女ができたらしいという噂もありましたのでね。そしてこの林君という人と実は連絡を取り合っていたのです」 (女社長)

(52)の「林君という人」と連絡を取り合っていたのは前後の文脈より刑事である「私」とわかる。元の動詞「連絡をとる」は「私ガ林君ニ/ト連絡をとる」という格をとり、連絡は一方的なものであるが、「連絡をとりあう」となると間接対象であった「林君」が相互動作の相手となりト格で示され、「連絡」は相互からの連絡となる。

### 3.1.4. 元の動詞が二格とヲ格を支配するもの

AガBニXヲ～する→Φ+BトXを～しあう

(53) (前略) それまで殆ど音信不通だった勇太郎と折々は手紙のやり取りもするようになり電話もかけ合い、そのなかから今度の澄子の怪我也知らせて貰ったという経緯が生れている。(寒椿)

(54) 見込みがありそうな家では、嘉吉は仕事をひきのぼしたり、台所に入れてもらって弁当を使ったりして、入念に家の内外に眼を働かせる。弁当を使いながら、女中と冗談口をききあうこともあった。嘉吉は三十二で、中肉中背。(驟り雨)

(53)「勇太郎」は長い間連絡をとっていなかった兄であり、その勇太郎と電話をかけあ

うもう一方の動作主は前後の文脈より妹とわかる。(54)の「嘉吉」は泥棒であるが、昼間は商いをしている色々な店を回っている。そして、昼食を食べる時にはその店の女中と冗談口をききあうこともあるということである。したがって、この「女中」というのは特定の女中ではなく、その時々でお昼を食べた店の女中である。

### 3.1.5. 元の動詞がト格を支配するもの

AガBト～する→Φ+Bト～しあう

元の動詞も相互動作の相手を表すト格を支配しているものである。

(55) ある時、おとなとせり合ったが、その時も、とうとうおとなを動かしてしまった。おれは気がいのようになってやったものだから、刈ったのなんのって、一匹の馬にしよわせきれないほど刈ったのだ。  
(路傍)

「おとな」とせりあったのは文脈より「おれ」とわかる。なお、「おとな」は一名の人間と解釈した。

その他：ふざけあう・できあう

### 3.1.6. 元の動詞がヲ格を支配するもの

AガBヲ～する→Φ+Bト～しあう

ヲ格で示されていた動作の直接対象が、相互動作になることによって動作の相手を示すト格をとったものである。

(56) いっぱうKさんの方は、フランスの市民生活に見事に溶け込んで生きているように見えた。買い物ひとつにしても、実に堂々と店のマダムとやり合っている。

(風にふかれて)

(56)は「店のマダム」とやり合っているのは文脈よりフランスに居住している日本人の「Kさん」だとわかる。前にも記したが「やる」は、「口論する」という意味になった時には「AガBトやる」とト格になると思うが、調べた範囲の辞書<sup>4</sup>には「口論する」の意味が出てなかったので、「こらしめる」の意味の「AガBヲやる」のヲ格を取るとしてここに分類した。

その他：知りあう・恋しあう・打ちあう

### 3.1.7. 所属物（特に体、または体の一部）に対する働きかけ

#### 3.1.7.1. 元の動詞がヲ格を支配するもの

AガBノXヲ～する→Φ+BトX'ヲ～しあう

(57) やっぱり誰かと唇をなめあいたいんだなあ。

(二十歳)

(57)の主語は文脈より学生運動をしている「私」である。元の動詞「なめる」は「私が誰かノ唇ヲなめる」であるが、「なめあう」という相互動作になったことにより、「誰か」は相互動作の相手となりト格をとったものである。そして、「唇」はそれぞれの「唇」を表し

ている。また、相互動作の相手は特定の間人ではなく不特定の誰かである。

### 3.1.7.2. 元の動詞がニ格とヲ格を支配するもの

AガBニ(Aノ)Xヲ～する→Φ+BトX'ヲ～しあう

ニ格で示された間接対象が、相互動詞になることによって動作の受け手を表すようになりト格をとるようになったもの。そして、X'は両者のXを表している。

(58) 浜田は茶っばい背広を着て、チョコレート色のボックスの靴にスパットを穿いて、(中略) 踊っています。そして甚だ怪しからんことには、或はこう云う踊り方があるのかもしれませんが、相手の女とぺったり顔を着け合っています。 (痴人の)

(58) の主語は文脈より「浜田」である。元の動詞「着ける」は「浜田ガ女ニ(浜田ノ)顔ヲつける」という格をとるが、相互動詞の「着けあう」となったので、間接対象の「女」が相互動作の相手を示すト格をとったものである。「顔を着けあっている」の「顔」はそれぞれの顔を示している。

## 3.2. Φ+Bトハ

補語として示された相互動作の相手が「ハ」によって取り立てられたものである。

### 3.2.1. 元の動詞がヲ格支配の場合

AガBヲ～する→Φ+Bトハ～しあう

元の動詞のときにヲ格で表された直接対象が、相互動詞になったことにより相互動作の相手となりト格を取り、それが更に取り立てられたものである。

(59) お品とは、神田の村松町にある大きな経師屋に奉公したときに知り合った。(朝焼け)

(59) の主語は文脈より「新吉」という男性で、「お品」からお金を借りたときの描写である。元の動詞「知る」は「新吉ガお品ヲ知る」という格をとるが、「知る」が相互動詞「知りあう」になったことにより、直接対象であった「お品」が相互動作の相手を示すト格をとり、もう一方の相互動作の相手である「新吉」が省略されたものである。

## 3.2.2. 所属物(特に体、または体の一部)に対する働きかけ

### 3.2.2.1. 元の動詞がニ格を支配するもの

AガBノXヲ～する→Φ+BトハX'ヲ～しあう

(60) パチンコは、集団的で、しかも一人ぼっちの遊びである。(中略) 自分の絵画の前に立ったお客は、おのおの自分だけで遊び、隣りの客など見もしない。そのくせ隣りの人とは、肱と肱とをふれあっている。 (男のポケット)

この主語は特定の人ではなく、パチンコをやっている不特定の「お客」であり、「隣りの人」もまた、パチンコをやっている人の隣りに座っている不特定の人である。「隣りの人」は両隣の人とも考えられるが、ここでは一方の隣りの人と解釈した。元の動詞「ふれあう」は「客ガ隣の人ノ肱ニふれる」という格をとるが、ひじの持ち主であるBが動作主体にも

なったので、相互動作の相手を示すト格をとるようになったものである。また、(59)では両者の体の一部が「Xヲ(脇を)」ではなく、「X<sub>1</sub>とX<sub>2</sub>トヲ(脇と脇とを)」で表されている。

### 3.3. $\Phi+B$ トモ

相互動作の相手が「モ」によって取りたてられたものである。

#### 3.3.1. 元の動詞が二格またはト格をとるもの

AガBニ～する/AガBト～する→ $\Phi+B$ トモ～しあう

以下の1例のみであった。

- (61) 「可愛い赤ちゃん」「色が黒くて凸坊で、はずかしいわー大人になったら、どんな顔になるだろうと主人とも話しあっているのでございますよ。」 (古今)

子供同士のままごとで奥さん役の二人の会話である。元の動詞「話す」の時には「私が主人ニ/ト話す」という格をとるが、間接対象を示すニ格を支配している場合には、「話しあう」という相互動作になったことによって、その間接対象が相互動作の相手となりト格をとり、主体の「私」が省略されたものである。

### 3.4. $\Phi+B$ ニ

相互動詞なのではあるが、相互動作の相手のト格ではなく、間接的対象を表すニ格をとっているものである。

#### 3.4.1. 元の動詞が二格をとるもの

AガBニ～する→ $\Phi+B$ ニ～しあう

- (62) はじめはもう一人の猫の客が、帰りの電車で話してくれたことなどをみな話すつもりだったが、病んだ母にむきあえば、とても健康な人のことなど話題にする気はうせてしまった。 (きもの)
- (63) まあ僕も若い人たちがどういう考え方をしてるか興味あるしね。少しは若い人に触れ合って、こっちも若返って…。 (三毛猫)

(62)は「子供が母に向きあう」であり、(63)は「僕が若い人に触れあう」のだが、この若い人は特定の人ではなく、不特定のだけれども、という意味である。

ところで、2.5にも「AハBニ～しあう」という格関係のものがあつた。そこでも「向きあう」という相互動詞があつた。「～ニ向く」「～ニに向きあう」は同じニ格をとっていて、交代可能なような気もするが、以下のAが不自然な感じがするように「対面する」という意味の時には「向く」が使えないのではないだろうか。そして「対面する」という意味の「向きあう」は、一方が他方に動作を行う「立ちあう/かけあう」などと同じ種類の動詞に近づいているのではないだろうか。

A:(?)病んだ母にむけば、とても健康な人のことなど話題にする気はうせてしまった。

イ：病んだ母にむきあえば、とても健康な人のことなど話題にする気はうせてしまった。

### 3.5. Aハ+中

文脈より相互動作の相手がだれなのかわかるので示されていないものである。逆にまた、相互動詞であることにより、その動作は一人ではなく相手がいることがわかる。

#### 3.5.1. 元の動詞が二格とト格、どちらも支配するもの

AガBニ～する/AガBト～する→Aハ+中～しあう

(64) 「田村って名のお客を捜しているらしいけれど…まさか、ぼくじゃ、ないだろうな」「でも…お訊ねになったほうが、よろしいわ…」樹生は椅子から立ちあがると、ボーイに近寄って、二言、三言、話しあっていたが、「電話がかかったらしいんだ」上着のポケットに両手を入れたまま、カウンターのほうに歩いていった。(關の)

レストランでボーイが客の名を書いた立て札を持って、その名の客を捜している。それで、自分のことかもしれないと思った樹生がボーイと話しているという状況である。「樹生」と一緒に話しあっているのがボーイだということは「ボーイに近寄って」という句から明らかである。

#### 3.5.2. 元の動詞が二格を支配するもの

AガBニ～する→Aハ+中～しあう

(65) 倫ははじめの中、須賀のまわりくどく話す口ぶりに本気で相手になって嘆きあっていたが、須賀はそういう時倫のいったことだけを切りはなして行友に私語くらしく(中略)、このごろでは倫は須賀が告げ口しても相手にならないことにきめている。(女坂)  
「倫」とともに嘆きあっていたのは「須賀」だということは「須賀のまわりくどく話す口ぶりに本気で相手になって」という文脈よりわかる。

#### 3.5.3. 元の動詞がヲ格を支配するもの

AガBヲ～する→Aハ+中～しあう

(66) 久子はふっと溜息をつき、刑事の顔をながめ、しばしだんまりのまま見合っていたが、刑事は閉口して、(中略)、戸をあけて廊下に待機していたらしい婦人警官を呼びこむ。(死児)

(67) ボクサーは、その闘いのスタイルから、ファイターとボクサーの二つのタイプに分けられる。ファイタータイプは、相手に接近し、パンチ力にまかせて、激しく打ち合おうとする。(一瞬の)

(66) は取り調べを受けている「久子」と、取り調べている「刑事」である。(67) は不特定のボクサー二人である。つまり、ファイタータイプのボクシング選手はだれでも、という意味であり、相互動作の相手は、ファイタータイプのボクシング選手と戦う相手である。

以下の(68)は相互動作の相手が文中に示されていないが、その後、「我々は抱きあうことによって～」とあるので、相手がいることがわかる。「我々」は少女と私である。

(68) 私は長い時間抱きあっていた。時間はどんどん過ぎ去っていったが、そんなことはた  
いした問題ではないように私には感じられた。我々は抱きあうことによって互いの恐  
怖をわかちあっているのだ。  
(世界の)

その他：にらみあう

### 3.5.4. 元の動詞が格を支配しない自動詞の場合

Aガ～する。Bモ～する→Aハ+Φ～しあう

(69) 二人で笑った。それから、私は、剛のいろんなクセをしゃべって笑い合った。一どう  
せ剛だって、私のことを甲斐隆之にしゃべりちらしてるんだ、これで、おあいことい  
うもので、それからみても、私と剛とは、よく似てる所がある。しかし、水野はすこ  
し、笑いをおさめて、「いやしかし、あんまりそう、向う見ずに遊ばんといて欲しいな。  
妬けます」と私に真顔でいう。  
(言い寄る)

「私」が「水野」という男性に自分のボーイフレンドの「剛」のことを話して、「水野」  
と一緒に笑ったという状況である。これは「私が笑った」「水野が笑った」という二人の動  
作が同時に行なわれたもので、両者間の動作の働きかけはない。そして、同じ動作を同時  
に行なった「水野」が省略されたものである。

## 4. まとめ

以上、接尾辞「あう」がついた相互動詞が述語になっていて、その動作を行なうのが二人  
のヒトである場合、接尾辞「あう」がつく前の動詞が支配する格が、相互動詞になること  
によってどのように変るかをみてきた。そして元の動詞の直接対象、または間接対象であるヒ  
トが相互動作の相手になる場合には両者間で相互の働きかけがあるが、次のような場合には  
相互の働きかけがなく、両者が同じ動作を同時に行なっていることを表わしていることがわ  
かった。①直接対象がモノである場合、②直接対象がヒトであるのだが、その対象者が、相  
互動詞になった場合の相互動作の相手ではない場合、③元の動詞が格を支配しない自動詞の  
場合。また、元の動詞がト格を要求する相互の動作を表わすものであっても接尾辞「あう」  
がさらについた相互動作になっているものがあるということもわかった。最後に、相互動作  
の相手を表わす格はト格が一般的であるが、「向きあう」に関しては二格をとっているもの  
もあるということがわかった。

なお、元の動詞が支配する格(但し、あわせ主語として現れている「AトB」の「ト」や  
「AモBモ」の「モ」は格助詞ではないが、一応ここに入れた)を次ページに一覧表にした。

元の動詞が支配する格

	二格/ト格	二格	二格/ト格 +ヲ格	二格/ト格	二格+ヲ格	ヲ格	ト格	ト格+ヲ格	格なし 自動詞	ガ	体の一部 B/Xヲ	体の一部 Bト/Xヲ	体の一部 B=A/Xヲ	元のVが ない
I あわせ主語になっているもの														
AトBハ	○	○*	X	X	○	○	X	○	○	X	○	○	X	X
AトBガ	○	○	X	○	○	○	○	X	X	X	X	X	X	X
AトBトハ	X	X	X	○	○	○	X	X	○	X	X	X	X	○
AトBトガ	○	X	X	X	X	X	○	X	X	X	X	X	X	X
AモBモ	X	○	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
II 主語と補語														
AハBト	○	○	○	○	○	○	○	○	X	○	○	X	X	X
AガBト	○	X	X	X	○	○	X	X	X	X	X	X	X	X
AハBトハ	X	X	X	X	○	○	X	X	X	X	X	X	X	X
AハBトモ	X	X	X	X	X	X	○	X	X	X	X	X	X	X
AハBニ	X	○	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
AハBトだけ	○	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
III 一方のみが明示されているもの														
Φ+Bト	○	○	○	○	○	○	○	X	X	X	○	X	○	X
Φ+Bトハ	X	X	X	X	○	○	X	X	X	X	○	X	X	X
Φ+Bトモ	○	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Φ+Bニ	X	○	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
Aハ+Φ	○	○	X	X	○	○	X	X	○	X	X	X	X	X

\*は「～ニ対して」も可能なものを含む

## 注

- 1 本稿では、二人のヒトであることを示す語(例：夫婦・恋人)、接尾辞(例：～同士)、副詞(例：互いに)などは取り扱わなかった。
- 2 仁田は「まとの相互構文」を次のように規定している。「もとの動詞が要求している共演成分の中で、ガ格と非相互関係にある共演成分が、相互動詞化によって、ガ格と相互性を帯びることになり、その結果、相互関係を有することになった二項が、ともに、もとの動詞が二項のそれぞれに対して有していた格関係の双方を帯びることになった文である、と規定できよう。」(p4)
- 3 第三者の相互構文について仁田は次のように述べている。「(前略)、<第三者の相互構文>とは、もとの動詞の要求する共演成分に加えて、共同行為者を表す要素を、動詞の表す動き実現にとって必要となる構成要素として、要求する文である、と規定できる。」(p24)
- 4 調べた辞書は次の2冊である。「現代国語例解辞典」(小学館) / 「新明解国語辞典」(三省堂)

## 参考文献

仁田義雄 (1998) 「相互構文を作る「Vシアウ」をめぐる」『阪大日本語研究』10、1-52

## 出典

時代やの女房・魔術はささやく・言い寄る・男のポケット・錦織・新源氏物語・  
葡萄と郷愁・果し合い・飼育・蟬時雨・女坂・隣の女・夏のことぶれ・  
華岡青洲の妻・蘇我馬子・結婚する手続き・忍ぶ川・葦手・花埋み・砂の上の植物群・  
国盗り物語・沈黙・心・風立ちぬ・ささやく河・幸福・闇の顔・戦艦大和・裸の王様・  
デュアルライフ・人間の羊・言わずにおいて・聖少女・交歓・向い風・夏の栞・  
女社長に乾杯・寒椿・驟り雨・路傍の石・風にふかれて・二十歳の原点・痴人の愛・  
朝焼け・男のポケット・古今百馬鹿・きもの・三毛猫ホームズの追跡・闇のよぶ声・  
死児・一瞬の夏・世界の終わりとハードボイルド・